

## 論文

特集2：東アジアの緊張の原因を考える

# 「感情・価値観」の問題としての歴史認識：平和教育を展望するために

石田 隆 至

(PRIME 研究員、大連理工大学海天学者)

## 1. なぜ「感情・価値観」の問題を考えるのか？

近年の東アジアの国際関係を捉えるうえで、いま何を考えなければいけないのか、逆に言えば、何が見落とされてきたのか——、このシンプルな問いを考える手がかりを提起するのが小論のねらいである。

東アジアの国際関係は緊張状態にあるといわれるが、実際には、経済面では既に互いを抜きにしては成り立たないほど依存度が高くなっており、文化の面でも特に若者の間では、“韓流・華流”、日本のサブカルチャーなどが相互に浸透しあっている。中国大陸・台湾や韓国において高い人気を誇るのは、日本のサブカルチャーだけではない。村上春樹の小説や浅田真央・福原愛などのスポーツ選手への注目度も日本と変わらないほどである。

他方で、政治面では確かに関係が悪化しているが、歴史問題が主であり、領土問題も日本近代の対外戦争の過程で生じてきたことから、歴史問題の一つとみることでもできる<sup>(1)</sup>。近年ではヘイトデモが続いたり、「反日デモ」が起きたりするなどナショナリズムが激化していると指摘され、その解決策としては、必ずといってよいほど、感情的にならず、互いの主張に耳を傾け、冷静に対話し、相互理解を深めていくことが提案される。

歴史認識における対立点とは具体的には何だろうか。たとえば「南京大虐殺」「従軍“慰安婦”」といった主な争点については、日本政府は公式見解として事実であると認めている<sup>(2)</sup>。歴史学的にも、歴史事実を否認する「まぼろし派」「虐殺否定論」の主張は実証的に否定されており、1985年という早い段階で決着がついている（吉田2011：190頁）。もちろん、被害者数といった細部の相違や「慰安婦」にされた女性に対する強制性の有無といった点については今も取り上げられているが、歴史認識を書き換えるような論点ではない。「靖国参拝」の是非も大きな争点だが、A級戦犯が祀られている事実そのものに見解の相違はない。また、日韓および日中の間では共同歴史研究や三国共通歴史教科書の作成作業なども行われてきており、それら歴史事実のレベルの共有はかなりの程度実現している<sup>(3)</sup>。つまり、〈事実レベル〉ではさらなる相互理解が必要になるような深刻な対立要因はそれほど多いわけではない。

他方で、2006年に日中歴史共同研究を提案した安倍晋三首相（当時）でさえ、2013年4月に「侵略という定義は、学界的にも国際的にも定まっていない」といった事実と反する国会答弁を行い<sup>(4)</sup>、「河野談話を継承する」と宣言しながらその検証に踏み切るなど<sup>(5)</sup>、確定した歴史<事実>を受け入れるのに大きな抵抗を感じていることが窺える。こうした主張や方針が一部政治家の間で大き

な支持を得ていることは言うまでもないが、市民や学生の間でも同様の認識が広がっていないだろうか。われわれが普段接している大学生のなかには、授業中あるいはレポートや感想文などで、いわゆる「嫌韓・嫌中」意識を悪びれず表明する者が珍しくなくなってきた。高校までの歴史教育でいかに近現代史の知識が不足しているとはいえ、日本がアジアに対する戦争を行った事実そのものを知らない学生はさすがに稀である。「戦争の歴史と韓国や中国への嫌悪感との関係性を考えてみよう」と問いかけると、彼らは何を考えればよいか戸惑いを見せながらも、“それでも「反日デモ」は許せない”といった結論だけはハッキリ主張することも少なくない。ネットや書店を覗けば、そうした言説が溢れているため、メディアの影響や教育の問題点を指摘したくなるどころだが、確定した歴史事実を受け入れられないのであれば、歴史に関する知識不足を補ったり、相手国の主張を深く理解したりするだけではやはり解決策にはならない。つまり、われわれが直面している歴史認識問題には、〈事実レベル〉にとどまらない次元の問題があることが見えてくる。

事実を受け入れられないという厄介な事態が生じているのは、その事実が持っている文脈性に抵抗感を感じているからだと考えられる。たとえば、南京大虐殺が事実であると認めることは、「日本人の誇り」といった価値観を傷つけ、気遣いや配慮を重視する日本人「本来の感情や優しさ」を否定することに繋がると考える人々がいる。彼らは、〈確定した事実〉の受け入れさえ拒めば、大事にしたい〈価値観や感情〉を守り抜くことができると考えているのだろう。歴史認識は、いま事実レベルの問題である以上に、〈価値観や感情〉の問題となってきた。したがって、この点を考えていくことが、現在の歴史認識問題の課題の一つであるといえる。

「歴史認識は価値観や感情の問題としての側面

を有している」という問題提起をすれば、様々な水準で戸惑いを覚える読者がいることは想定している。しかし、これだけ歴史研究や相互理解の取り組みが重ねられても、歴代政府の公式見解に反する言動が首相をはじめ閣僚クラスの政治家でも後を絶たず、事態は好転するどころかむしろ悪化していること、日本政府の謝罪表明や歴史認識などに対して被害国からの不満や反発が今も解消されていないことを考えても、事実認識の次元だけでなく、それをめぐる感情や価値観の次元の問題が存在していることを踏まえておく必要があるだろう。

あるいは、感情は、客観的認識や科学的営為においては極力排除しなければならないものだという観点において、不安を覚える向きもあるだろう。しかし小論の問題意識は、感情を認識や科学と対立的に捉える視点にこそ問題が潜んでいるのではないかという点にある。社会科学を基礎付けたマックス・ウェーバーが「価値自由」概念で確立しようとした方法論的倫理は、単に認識に価値判断を持ち込むべきではないとするものではなかった。何を問題とするかという判断には必ず研究者の価値観が影響するため、自身がどのような価値にとらわれているかをたえず自覚すること、そしてその価値観の妥当性を常に吟味し続けることではじめて、客観的認識に近づくことができるという倫理だったことを思い起こしたい（ウェーバー1982）。

小論でも、事実を受け入れるという基本的姿勢に困難が生じたり、事実に基づくことなくある判断を（無）意識的に選択するとき、事実以前に感情や価値判断がその認識に大きく作用していると考えられる。たとえば、A級戦犯を合祀した靖国神社に首相が参拝したり、「英霊」に感謝を表明したりすることは、過去の戦争への反省を撤回あるいは曖昧化するものであるという批判がある。東京裁判の結果を受諾して国家主権を回復した経緯を

考えれば、被害国・戦勝国からのそうした主張は論理的には整合性を持っている。一方、その批判に対して、「心の問題だ」「英霊への感謝を表明しているだけで、過去の戦争を肯定するつもりはない」という反論は、国際関係の文脈に基づいた論理整合的な応答ではなく、感情や価値観を前面に出した＜反応＞であるがゆえに噛み合わない。にもかかわらず、アジアの被害者は「感情的」であり、それに冷静に対応する日本政府や日本社会は「客観的」だといった捉え方が支配的ではないだろうか。

さらには、歴史認識における感情や価値観の側面に着目するというと、戦争に関するナショナルスティックな記憶を刺激するばかりだから避けるべきだという危惧もあるだろう。しかし、ナショナリズムや記憶を構築されたものと捉えて解体していくだけでは、現に存在している感情は放置されたままであり、いつまでも解決しない要素が残されてしまう。

もちろん、これだけではまだ「感情・価値観としての歴史認識」という視角への違和感が残るだろう。そこで、小論では、袋小路に入り込んだ東アジア国際関係を考えるために、感情や価値観を含めた形で歴史認識を捉える必要性を共有していくきっかけを提供してみたい。

なお、今回は扱うことができないものの、以下で検討する内容は、未来の東アジア関係を担う大学生との教育において実践し、その成果を検討する必要があると考えている。筆者は、国際関係を専攻する新入生と入門的な内容を学ぶゼミなどを担当しているが、重要なテーマの一つである東アジア国際関係を扱うことに、近年大きな困難を感じている。社会的にも中国や朝鮮半島への嫌悪感が高まっており、なぜそうなっているのかを検討するための文献を選ぶにも、歴史修正主義的な内容に満ちた書籍が溢れており、学生自身が「科学的」な文献を適切に選ぶことはほとんど不可能と

いえる状況にある。科学的な営みの背景にあった感情や価値観が極端に前景化している状況について、共に考えることなしに学び始めることができない現状だからこそ、学生とともに、どのような「知」のあり方が求められているのかを模索していく必要があると考えている。

## 2. 「感情記憶」という問題提起

小論の問題意識と呼応する先行研究は、管見の限り多くはない<sup>(6)</sup>。その中で、日本でも注目された議論として、中国社会科学院の孫歌らによる「感情記憶」という問題提起を中心に挙げたい。

竹内好や丸山眞男らの政治思想の検討を通じて東アジア関係や日本社会について精力的に論じている孫歌は、2000年2月に中国の月刊誌『読書』に発表した論考のなかで、「感情記憶」という概念を提起した。同年4月には日本の『世界』で翻訳が掲載されたのに加え（孫2000）、呼応する論考や座談会が相次いで発表されるなど、日本でも議論が喚起された<sup>(7)</sup>。中国発の議論がこれほど注目されたのは、それが「南京大虐殺」をめぐって提起されたからだけではない。歴史学を中心とした近代西欧発の科学が有する限界についてのきわめて根源的な問題提起を含んでいたからでもある。

孫歌によれば、中国の人々にとって南京大虐殺とは、「具体的な歴史事件そのものを直ちに意味するもの」ではなく、「中国人の感情記憶の中では、最も際立ったシンボルなのだ」という。

第二次世界大戦中の日本軍が中国国内で犯した犯罪行為を象徴し、今に至るも真に犯罪を認めようとしない日本の政府と右翼に対する中国人の怒りを象徴し、戦後50年以上に及ぶ中国人と日本人の感情の傷という面における、修復しようのない溝をも象徴しているの

である（孫2000：159頁）。

東アジアに横たわる歴史認識の遠大なギャップを、現在に続く感情、被害当事者ではない世代にも共有される感情の記憶という面から捉えている。現在の歴史認識問題が、＜事実の受け入れ＞を拒み、感情や価値観の次元で立ち現れているという小論の立場と響き合う問題意識といえる。ただ、「感情記憶」という概念が有するラディカルさは、既存の実証主義歴史学の特権性に全面的に挑戦する形で提起された点にみられる。

「南京大虐殺」という、この簡単なシンボルに拠って、また「被害者30万人」という一つの数字に拠って、中国人は日本人の友と敵を確認する（孫2000：159頁）。

日本社会においては、南京大虐殺を「歴史事実」と考える研究者や市民の間でも、その犠牲者数についてはなお確定されておらず、「30万人」という数字を「事実」に近いものと考えている人はむしろ稀である。しかし、孫歌はこの「30万人」という数字を議論すること自体が、中国人を敵としかねないと明確に表明している。もちろんこれは、日本社会や日本の歴史学研究の水準に関する端的な知識の欠如に由来する言明ではない。むしろ、「日本文化圏の知識人が書いた評論と見まがう文脈性を備え」、「日本の思想文化の背景と論壇の状況に、髪に分け入る感性を持っている」現代中国一級の知性であると日本でも高く評価される研究者である（代田2011：24～25頁）。その孫歌が、「30万人」という数字をめぐって歴史的検証を行う日本の研究者の中に、南京大虐殺の事実を否定する「まぼろし派」を実証的に破綻させようとする「良心的な知識人」が少なからず含まれていることを知らないはずがない。だとすれば、どのようなねらいから、こうした挑戦的な問題提起を行ったのかを問う必要がある。

孫歌は、南京の犠牲者数をめぐって議論する研究者の「基本的な学問原理」は、「歴史の『客観

事実性』』にあると指摘する。その対立項にあるのが「生きた人間の感情」であるという（孫2000：168頁）。欧米の学者も含めたそうした研究者らは「文献資料の考証に満足して、人々の感情記憶を完全に無視したり、果てには敵視したりするのだ」と指弾し、「このような歴史学の絶対的な合法性はどこから来るのだろうか？」と鋭く問いかける（孫2000：167頁）。

感情の記憶の喪失は、歴史から緊張感と複雑性を奪い、これを統計学で代替できるような死んだ知識に変えてしまう。そして、正にこのような死んだ知識こそ、現時の政治やイデオロギーにたやすく利用されてしまうのだ（孫2000：168頁）。

歴史について思いをめぐらすおよそすべての者が、歴史学の実証的成果をもとに歴史認識を有することができることに、孫歌が気付いていないはずはない。だとすれば、実証主義的方法論においては、人々の感情記憶があまりに不当に抑圧されていること、そしてそれが適切ではないことを言おうとしていることになる。実際に、「専門家にはこの種の感情記憶を歴史の真実探求の障害と見なす資格がある」のか、とも問うている（孫2000：165頁）。

ここまででも、「良心ある」歴史学者らは相当の戸惑いを覚えるようなきわめて根源的な問題提起になっている。後に検討するように、実証主義歴史学の立場からの真摯な反論も見られた。ところが、孫の論考の末尾には、さらに激烈な現状批判が記される。

中国人に理解できない基本的問題とは、同じく戦争責任を追及する良心ある日本人にもかわらず、なぜ多くの人は東史郎の言葉の信憑性問題に拘泥するのだろうか<sup>(8)</sup>、ということである。（中略）それはつまり、人々の南京大虐殺に対する歴史の記憶へと向けた関心を捻じ曲げることであり、これは虐殺の

数字に拘泥することと、効果という面では同じである。問題は（中略）この種の「捻じ曲げ」が、日本の言説空間では一種の方向性と化してしまうことになる。日本の良心ある知識人は、このような捻じ曲げられた議論に拘泥する間に、良心ある中国人と対面する媒介を喪失してしまい、中国人とこの間の歴史を共有する契機をも失ってしまったのだ（孫2000：168～169頁）。

多くの「日本の良心ある知識人」は、この問いかけをどう受け止めればよいのか、深刻な当惑に直面したことだろう。小論もまた、歴史認識を捉えるうえで、その構成要素として「感情」や「価値観」にふさわしい地位を提供することを訴えるものであるが、実証主義歴史学に全面的に挑戦するまでの問題意識は有していない。確かに、従来の科学的歴史学においては、文書史料の扱いに比べて記憶などのオーラルヒストリーの分析方法は確立されているとはいえない側面があり、それ故に歴史史料としての「記憶」が置かれた地位は高いとはいえない。文書史料の空白を暫定的に補充する「役回り」を担っている側面も否定できない。ただ、文書史料もその信頼性は「史料批判」という方法を通じて担保しなければならぬにもかかわらず、史料の「存在」感と比した場合、「記憶」の信頼性はそれだけで二次的なものとされがちである。実際に、史料の収集に加え、聴き取り調査を主な手法としている筆者は、聴き取った記憶を歴史事実の確定のための「証拠」とするためには、文書史料による裏付けが不可欠となる場面を日常的に経験している。つまり、「オーラルヒストリーも、実証主義歴史学も」という立場で研究を進めてきている。

孫歌もまた、文書記録が残されにくい分野の歴史研究がこうした実態にあることは十分理解しているはずである。また、実証主義歴史学では取りこぼしてしまう「歴史」があることは、歴史学の

側でも自覚されている（吉田2008）。近年のオーラルヒストリー研究の発展はそれと無関係ではないだろう。だとすれば、このあまりにラディカルな問いかけは、それなくしては浮かび上がらせることができない何を投げかけようとしたのか？

こうした問題提起は、孫歌だけに見られるものではない。孫歌の問題提起を受けて、日中の歴史研究者らで行われた座談会に出席した北京大学の戴錦華もまた、同様の問題意識を示している。戴は、侵華／日中戦争の歴史について「ずっと複雑で強烈な感情を抱えてきた」と振り返り、それは「ずっと強烈な身体体験を伴うもので、中国の四字熟語で言い表せば、『切膚之痛』（膚に接近しているような非常に身近な痛み）という言葉がぴったりだ」と述べている（戴・孫ほか2000：191頁）。戦後生まれの戴にとっても被害当事者と同じような痛みとして戦争が感情や身体に記憶されていることが示されている。戴はこうした感情記憶が既存の学問体系の中ではきわめて捉えがたいものであることを次のように述べている。

「ポスト構造主義」の後の知識人として複雑な現実の政治権力構造に直面し、その抑圧に抵抗しようとするとき、われわれが使用可能なのは依然として「客観的」「理性的」「論理的」なタームしかありません。こういった言葉や思考様式を持つがために、とうてい人々が歴史を経験し思考するときに必然的に併せ持つ複雑な身体体験と感情の記憶に到達することはできません。（中略）我々の学術訓練や知識の系譜、我々の物の書き方や社会的立場は、逆に身体の記憶と感情の記憶に対する抑圧を来すわけで、私が極力国家ナショナリズム的な表現を避けようとするとき、この抑圧された感情が、必ずやそれと似かよった歪んだ形で浮上してくるのです（戴・孫ほか2000：191頁）。

感情の記憶や身体の記憶は既存科学の言葉で十

分に捉えることができない特質を持っているだけでなく、そうすることを抑圧する作用が働いていることが指摘されている。一見すると、近代人文社会科学の方法論的限界を突いた指摘で、孫歌の問題提起よりいくぶん穏当に聞こえるかもしれない。しかし、戴の別の発言を引用すれば、孫と同様のラディカルさを秘めていることが伝わってくる。

いったん南京大虐殺あるいは30万という死者の数字について、いかなるやり方にしろ疑問を挟んだのなら、ほとんど例外なく相当数の中国人（私を含めて）の怒りの感情を引き起こすことだろう。私たちはそれを、ある種の復讐の要求と名づけてよいかも知れない（代田2000：54頁）。

彼女らのねらいが、中国の人々の感情記憶を殊更に取り上げることで、ナショナリズムを煽るといった種類のものではないことは言うまでもない。もしそうであれば、矛先を実証主義科学に向ける必要はないからだ。事実、筆者は2012年12月に南京師範大学で行われた国際シンポジウム「戦時下の都市民衆の日常生活」に参加した際に、現地の代表的な南京大虐殺研究者と議論したことがある。同大学は「南京大虐殺研究センター」を擁し、中国における関連研究の一拠点である。彼らもまた、日本の「虐殺否定論」に対抗するため、きわめて実証的な手法で南京大虐殺の歴史事実の解明に精力を注いでいることを力説していた<sup>(9)</sup>。文革期までの歴史学が科学的というより政治的な結論を先行させた研究手法を採っていたこともあり、客観的で実証的な研究手法がようやく定着したことに一種の自負を抱いている感が伝わってきた。そうした動向は歴史認識の共有のために重要な契機であるといえる一方で、現在の日本社会で拡がるばかりの〈歴史事実を受け入れない〉風潮についてどう対処しようとしているか質問してみた。残念ながらその意図はうまく伝わらなかった

ようで、実証主義的な研究を重ねることでそうした誤謬を打破していくという回答しか聞かれなかった。孫歌らの批判は、こうした「中国の良心的な知識人」にも向けられている（孫2000：170頁）。

### 3. 実証主義歴史学批判は日本でどう受け止められたか

孫歌らの批判はきわめてラディカルであるが、その問題提起から15年を経た現在、冒頭で確認したとおり、「感情記憶」が歴史認識問題の〈主戦場〉となっている様相を考えると、きわめてアクチュアルな指摘だったといえる。「日本の良心的な知識人」たちはこうした問いかけをどのように受け止めたのだろうか。

まず、近代中国思想史が専門の溝口雄三は、以前から孫歌と問題意識を共有していたこともあって、その実証主義歴史学批判についても正面から受け止めている。そして、自らが推進していた「日中・知の共同体」プロジェクト（国際交流基金「知的交流事業」）のなかで孫らとともに、歴史（学）に抑圧されてきた感情記憶の扱い方についても検討している。

簡潔にまとめれば、実証主義歴史学の方法論的限界を認めつつも、感情記憶をめぐるラディカルな問いかけについては、「30万という数字が引き起こした紛糾」と呼んでいるように、そのままでは受け入れられない側面があるという立場をとっている（溝口・孫2002：230頁）。具体的には、「『南京』は過去の歴史記録としてあるだけでなく、歴史記憶として現在に再生産されつづける」（溝口2000：138頁）ため、感情記憶を掬い上げる意義を認めつつも、その方向性としては「歴史の磁場」のなかに位置付けていく必要性を説く。

私は日本の中に確かに現存する反中国あるいは嫌中国的な感情を、反や嫌を理由に疎ん

じようなどとは思わない。問題にすべき相手は、実はその感情ではなく、その感情を形成してきた歴史の磁場だろうと予感するからである。感情記憶が、過去から現在までの幾層にも積み重なり、また幾条かの流れにもなっている、複雑に「絡み合った」歴史の現在形であるとするならば、その絡み合いを生み出す歴史の磁場に直面しない限り、日中間の問題の解決はない（溝口2000：138頁）。

こうした方向性は孫歌の問題提起に寄り添うように見えながらも、歴史学をより精緻化する作業工程のなかに「感情記憶」を組み入れることで、そのラディカルさを「ソフト・ランディング」させていく形の受け止め方であるといえないだろうか。「感情記憶の歴史化」もまた、実証主義の枠内にとどまっているからである。それは、「感情記憶と歴史事実の二重奏をどのように歴史化するか」（溝口2000：128頁）といった問題提起からも読み取れる。

孫歌の問いかけに苛立ちさえ読み取れる反応を示したのは、中国近現代史が専門の古厩忠夫である。南京大虐殺の歴史事実を確定させるうえで大きな役割を果たした南京事件調査研究会の一員でもあった古厩の反論は、『感情記憶』と『事実記録』を対立させてはならない」という論文タイトルに集約されている。古厩にとっては、『感情記憶』をも重視している」（古厩2001：139頁）がゆえに南京大虐殺の実証研究に携わってきたとして、孫による二項対立的な捉え方に不快感を漂わせている。また、「誇張された叙述はたちまち大虐殺の虚構化に利用され」、「『感情記憶』の不明瞭さを悪用して『事実記録』を抹殺しようとする論者がいる」日本では、「本当は20万であるか、30万であるかなど数字の詮索は本質的な問題ではないはずだが、日本では必要である」（古厩2001：141頁）と主張する。孫の実証主義歴史学批判に対して十分に予想される反論を率直に表明

したものと見える。結論として、虐殺否定論者らが「実証で敗退すると事実を無視した扇情的な議論を行って、日本人の『感情記憶』や『誇り』に訴える」ようになった現実も見てきた古厩は、日本の戦後歴史学が「あまりに実証に取り憑かれすぎている」という「批判は的を射ている部分があると思う」と孫の問題提起に一定の理解を示しながらも、「歴史の修正を辛くもとどめることができるものがあるとするれば、それは事実の重みしかない」としている（古厩2001：146頁）。

ただ、孫歌は「日本の良心的な知識人」による実証主義的な努力と、それによる「否定論者」のさらなる迷走という近年の実態を十分踏まえたいうえで感情記憶論を提起しており<sup>(10)</sup>、その点で、古厩の反応は孫のラディカルさを受け止めきれたとはいえない。

#### 4. 実証主義歴史学者の前提にある「感情・価値観」

日本の歴史学者が受け止めきれなかった側面は、もう一つある。それは孫の批判のラディカルさの意味を考える手がかりをも与えてくれる。感情記憶に対して「冷静かつ客観的な」立場から、それを文書史料より一段価値の低いもの、あるいは事実解明の障害にさえなるものとする扱いを不当だと孫が見なしていたことは、繰り返し確認してきた。

この点とセットになって提起されていたもう一つの軸は、そうした「客観的」な判断の前提に見出される「既成の枠に囚われて発言している」あり方そのものだった（孫2000：166頁）。感情記憶といった不確かなものは排除すべきだと考える研究者らは、＜西欧近代科学は正しい・民衆の感情記憶は信憑性が乏しい＞という「既成の枠」を不動の前提としているがゆえに、そうした立場に立

てるという批判である。確かに、いかに信頼性の高い文書史料を前にしても、あらかじめ有している特定の観点（たとえば、「南京大虐殺はなかった！」）を補強するために恣意的に取捨選択されたいうえで利用される可能性は排除できない。現在の＜事実を受け入れない＞歴史観の拡がりはまさにそれに当たる。また、史資料として残されることのない「現実」が、「感情記憶」を通じて浮かび上がってくる可能性も十分に考えられる。にもかかわらず、「感情記憶」は既存の科学では十分に語られる言葉を持たないという異議申し立てがなされても、十分に顧みられることがないのは、西欧発の実証科学の方法に依拠するしかないとする「既成の枠」に強く囚われていることを示している。つまり、実証主義的で科学的な装いをした言説の前提には、客観的・科学的とはいえない思い込みや一種の感情さえ伏在していることが、あまり自覚されていない点を「既成の枠に囚われて」と問題視した。ウェーバーの価値自由概念と響き合う論点である。同様の指摘は、「日本の良心ある知識人が世界に向かって自らの声を伝達しようと試みる際、自らの民族感情をどのように把握するかは、重要な試金石である」（孫2000：169頁）といった抑制的な表現で繰り返し示されている。

ラディカルな問題提起とセットになって示されるこうした解釈学的な問いかけにも、溝口や古厩は一定の応答を示している。

孫歌の問題提起を正面から受け止めるスタイルで応答した溝口は、この点についても肯定的に引き取っており、認識者にとっての「現実とは、自分の知のカプセルの窓から眺められた光景である」（溝口2000：133頁）という比喩を交えて敷衍している。

現実とは、カプセルの窓を通して受け入れられ、自分の知の世界の論理で解釈され、甚だしきは、それによって価値づけられ、統御さ

れようとさえする。しかも、これらの人々にとっての自分の知の世界は、往々にして、自国の知の文脈の中で形成された、つまり自国の世界が相対化されないまま無自覚に自分であるという、他者不在の知の世界なのである（溝口2000：133頁）。

ここに記されていることはきわめて常識的な内容であり、ほとんど異論も出ないだろう。しかし、孫歌の場合、こうした主張をあの手でラディカルな実証主義批判とセットで提起していたことを思い起こしておく必要がある。いかなる認識も国家という「枠」を脱し得ないがゆえに、それを自覚する作業が重要であるという溝口の受け止め方は、いわば万人に自戒を促す普遍的な解決策といえる。しかし、孫歌らは、「感情記憶」が容易に言語化されず、近代科学に掬い上げられることもないその＜非対称性＞を問題にしていた。その非対称な構造の中で優位に立つ側ほど、自己の前提に無自覚なままでいられる。この二重の＜非対称性＞への自覚を促すために、よりラディカルな次元からの問題提起が必要とされたのではないだろうか。そう考えれば、「感情の持ち主自身が、自分でも気付かない、ある無意識の歴史意識といった世界に踏み込む必要があるのかもしれない」（溝口2000：137頁）とする溝口の受け止め方のあまりの「正しさ」は、再び孫歌らのラディカルさを削ぎ落とすものといえる。

こうした溝口の受け止め方への批判を経由する形で孫歌に異論を唱えているのが古厩である。古厩もまた、孫歌の矛先が「『日本の良識ある知識人』に向けられていることに気づき、私は緊張感をもって自分自身を点検しながら読んだ」と記しており（古厩2001：138頁）、人々の認識の前提にある「既成の枠」が問題にされていること自体は受け止めている。

以下では、2001年4月に『新しい歴史教科書』が検定を通過したことを受けて発表した溝口の新



聞寄稿に、古厩が強い苛立ちを示している箇所注目したい。問題視されたのは溝口の発言の次の箇所である。

その背後にある「歴史観」を見てみると、加害行為を反省する側も、認めまいとする側も、アジアの近代過程において日本を「優等生」、中国をはじめとする他のアジア諸国を「後進的」とみなす、という点では実は同じである（古厩2001：141頁）。

日本の加害を否認する側が、アジア諸国を「後進的」と見下している点については説明不要だろう。加害を反省している側もまた、アジアへの優越感を共有しているという溝口の問いかけに、古厩は「それはないんじゃない？」と思えてしまうと不満を表明している（古厩2001：141～142頁）。古厩自身が、教科書の検定・採択をめぐる歴史修正主義グループとしてのぎを削っている「良識ある知識人」の一人だったからなおさらなのだろう。「日本がそのような修羅場であることを、日本に居て、現実を重視される溝口氏が知らないはずはないと思うのだが」とまで述べている（古厩2001：141頁）。

しかし、加害を反省する「良心的な日本人」でさえアジアに対する優越感を持っているという溝口の批判が新聞に掲載されたものであることを踏まえると、多少の戦争責任は日本にもあると考える「一般的な日本人」が念頭に置かれていた発言だと考えた方がいいのではないだろうか。そうした人々の間では、歴史修正主義の台頭は一部の特殊で過激なグループの問題だと矮小化され、「先進的」で民主主義国の日本社会に備わる自浄能力に期待していたがために、社会的に警戒感が高まらず、検定を通過してしまった側面に溝口は注意を促そうとしたとも考えられる。それは裏を返せば、アジアへのある種の「優越感」に由来する楽観であったともいえる。そうした社会の自己意識を問わねば、右傾化に歯止めがかからないのでは

ないかと問いかけようとしていたのであり、古厩のような「良心的な知識人」に向けられた批判ではなかったと考えることもできる。

それに古厩が「それはないんじゃない？」とあえて感情的な表現を交えて反応したのは、彼が加害責任とその反省を強く意識していることの表れであると同時に、だからこそ自身はアジアへの「優越感」とは無縁だという自己意識が投影されていたといえる。

続けて古厩は、こうした溝口（や孫歌ら）の問いかけを、ナショナリズムを背景に「自虐史観批判」という衣をまとった日本版「感情記憶」の反対項としての、中国のナショナリズムの高まりという定型的な「枠」——メディアで一般的に見られる分かりやすい既成の「枠」——に落とし込んで理解している（古厩2001：142頁）。

かつて、われわれがナショナリズムを抑圧民族の悪いナショナリズムと被抑圧民族の良いいナショナリズムに分けて理解しようとしたが、いまや東アジアでもナショナリズムそのものの持つ二面性を議論すべき時がきている（古厩2001：142頁）。

中国の人々が持つ「感情記憶」には正当な地位が与えられることがないという＜非対称性＞にはほとんど注意が払われず、ナショナリズム一般の普遍的問題と位置づけられている。つまり、「感情記憶」が提起するラディカルさは、単なるナショナリズムの激化の表れとして受け止められている。

古厩はまた別の箇所で、1999年に制作された日中合作映画『陳宝』<sup>チンバオ</sup>のなかで描かれている日本兵のあり方に触れながら、「中国で抗日戦争映画を創る目的」についてこう記す。

そこでは日本兵は鬼である、鬼は人ではない、だから日本兵には心はないという三段論法で処理される。だが、それでは日本人にとってあまりに救いがない。本来ヒューマニ

ズムの持ち主であるはずの日本人の庶民がどうしてあのような残虐行為に走ったのかを説明せねばならないし、できれば、せめて今後の拠り所となりうるような良心の証があったことを確かめたい。そうでないと日本の観客は映画館に足を運ばないであろう（古厩2001：143頁）。

ごく一般的な市民が戦場ではどうしてあれほどの残虐行為をなしたのかというメカニズムを説明しなければ合作映画とする意味がないという批判は、筆者自身も共有するところである。鬼が鬼の行為をしたのではなく、人を鬼に変えるメカニズムのなかで残虐な行為が行われたという“個人と社会の相剋”を突いた科学的な「問い」として描くからこそ、歴史に今向き合う意味が導き出せるといえる。残虐行為を行ったと現在も非難され続ける民族の子孫たちにとって、そのメカニズムの解明は一種の「救い」になりえるだろう。

しかし、そのメカニズムが解明されたところで、というより、解明されたにもかかわらず、現在まで日本政府や右派だけでなく、一般的な民衆に至るまで、戦争責任に十分に向き合うだけの本来の「ヒューマニズム」が発揮されないことに、中国の人々は「救い」のなさを感じていることだろう。問題にしなければならないのは「救いのなさ」をめぐるこの＜非対称性＞であり、「感情記憶」という問題提起もその点を突いていた。

なぜこうしたギャップが残ってしまうのだろうか。古厩も決して自己の認識の前提にある「既成の枠」に無頓着だったわけではない。以下の主張も誰もが首肯できるものだろう。

日本人は日本に生まれ育ったという身体経験を廃棄することはできない。できるのはそうした自分を対象化し、他者に目を開いていくことであろう。言い換えれば、木を植え替えることではなく、接ぎ木する作業である（古厩2001：144頁）。

ただ、問題はもう一歩先にあるというのが、ここまで行ってきた古厩や溝口の論考の検討から導ける帰結である。自分が囚われている「既成の枠」を対象化しても、結局その「枠」にとどまり、再生産するのでは問題の構図は変わらないままである。そうした選択の背景には、「実証主義歴史学」「ヒューマニズム」などが表象する「普遍性」に依拠するしかなく、そこから一歩ずつ共同性が立ち上がってくるだろうという強固な“信念”がある。

しかし、「実証主義歴史学」「ヒューマニズム」の表象する「普遍性」そのものが、＜非対称性＞を足場にして辛うじて成立している点を告発したのが、「感情記憶」論の射程だった。「感情記憶」という問題提起が受け止められない構造そのものを検討することで、ようやく＜非対称性＞を捉えそこねる「枠」の向こうにある感情や価値観が見えてきた。それは、「対象化した自分」をもう一段＜対象化＞しないと立ち現れない地平だったがゆえに、孫歌らの問いかけは「なぜここまでラディカルなのか」という「問い」を導く形式をとっていたといえる。

## 5. むすびにかえて

孫歌らは、「日本の良心的な知識人」が、自分自身と中国人の「感情記憶」およびそのギャップを理解し、歴史修正主義者の虚妄を破綻させるのに実証主義的な努力を重ねていることは十分理解していた。それでもなお、実証主義歴史学批判を伴った「感情記憶」概念を提起する必要があったのは、それなくしては日中間に横たわる問題の地平が開かれてこないと考えていたからだろう。それが何なのかは、今のところ小論も積極的な言葉を与えることはできない。ただ、ここまでの考察を踏まえて少なくとも以下の点を指摘しておくことで、孫歌らが開こうとした問いの地平を

閉じることなく、感情や価値観を含めた歴史認識がどのような“磁場”を描くのかを問い続ける必要があるのではないかと考えている。

溝口にせよ古厩にせよ、孫歌の問いかけにある意味で十分に受け止めつつも、最終的には研究倫理としての「自己の対象化」、あるいは自己の専門分野である歴史学的方法論の精緻化でもって対応しようとした。しかし、そのレベルでは、孫歌らの批判のラディカルさは宙づりになったままである。ここで再び見出せる<非対称性>としては、ラディカルな問いかけに対して「日本の良心的な知識人」らはそれを受け止める姿勢を示しつつも、最終的には自分の依拠する近代科学の研究手法や視角にとどまるという、研究者としてはある意味で「穏当」かつ「正当」な応答を示した。これに比べて、孫歌らは同じく西欧近代科学に学びながらも、そこに依拠しては表象することさえ困難な「感情記憶」を抱えて引き裂かれたままである。

孫歌らが開いた問題の地平を若者や市民とともに深めていくために、本来ならここから、大学教育における平和教育や多文化共生教育の実践および展望を検討していかなければならない。「PM2.5」や「中国製食品の安全性」、「韓国・朝鮮人へのヘイトスピーチ」など、東アジアを取り巻く諸問題をめぐって、学生たちの意見にはメディアの影響を大きく受けた「既成の枠」が見受けられるからである。ただ、学生自身も、自身の認識や評価がメディアによって「作られている」側面があることをかなりの程度自覚している。だとすれば、「平和教育」「多文化共生教育」が目指すべきことは、「対象化された自己」をもう一段<対象化>することにあり、孫歌らの問題提起と響き合ってくるところがある。残された課題として、次の機会に譲りたい。

## 註

- (1) 実際には、中国や北朝鮮の「社会主義」に対する「冷戦思考」の残存という問題を取り上げる必要があるが、意識の深層に入り込んでいる現象であるため、別の論考を要する。ここでは、社会主義諸国に対する「一党独裁」「言論の自由の欠如」といった批判が冷戦時代から継続するイデオロギー的批判であること、また、中国への留学を経験した学生なら、そのような批判はネット時代の中国の現実にもまったくそぐわないものであることに気付いていることを指摘しておくにとどめたい。
- (2) 外務省 HP：歴史問題 Q & A 「問 6 『南京大虐殺』に対して、日本政府はどのように考えていますか」 <http://www.mofa.go.jp/mofaj/area/taisen/qa/08.html>；「問 5 慰安婦問題に対して、日本政府はどのように考えていますか」 <http://www.mofa.go.jp/mofaj/area/taisen/qa/05.html>
- (3) たとえば、日中韓 3 国共同歴史編纂委員会 2012。
- (4) 『読売新聞』2013年 5 月 4 日付朝刊「『侵略』首相発言 沈静化図る 国内外で波紋 政府 真意説明へ」。
- (5) 『読売新聞』2014年 3 月 13 日付朝刊「河野談話 見直さず 菅官房長官 日韓『すり合わせ』は検証」。
- (6) 歴史認識における「感情」への着眼という着想は、精神病理学者の野田正彰による「感情交流」アプローチから大きな示唆を得ており、野田・張宏波らとともに共同研究を行ったことがある（科学研究費補助金：挑戦的萌芽研究『『東アジア共通の歴史認識』構築に向けた『感情交流』アプローチの応用研究』研究代表者：張宏波、2011～2013年度）。小論はその成果を踏ま

えたものである。野田1998、野田2009を参照。

- (7) 溝口2000、戴・孫・高橋・酒井2000、代田2000、古厩2001など。なお、これらの議論を簡潔に整理したものとして、石井2013の第一章を参照。
- (8) 東史郎は元日本軍兵士として「南京攻略戦」などに加わった体験を、従軍日記をもとにして出版した（東1987）。しかし、その内容をめぐって1993年に元上官から名誉毀損で提訴され、2000年に敗訴が確定した。東史郎の日記の記述の一部に客観的証拠がないと裁判所が判断したことを受けて、裁判で勝訴した側らは南京大虐殺という史実自体が「捏造」だったと拡大解釈した。孫が指摘しているのは、「良心ある日本人」の中にも、東史郎の記憶には曖昧なところがあり、慎重な対応が必要だとする声が少なからず存在していたことである。
- (9) 日本側の一次史料のみに依拠して虐殺の存在を実証した論考として、程兆奇2008を参照。この論考は、2007年1月末に東京財団が主催した「中国の歴史研究講演会」において発表された内容をもとにしているが、成果の公表は見送られていた。その後、『人権と教育』誌上に抄訳が掲載された。
- (10) 別の論考で、「私はもちろん、中日両国の各界の人々や知識人が様々な形式で抗日戦争の歴史について調査をしたり処理してきたことを無視するものではない。またこの歴史について中国と日本の学者間で行われた『共同研究』の成果を否定しようと意図しているものでもない」と記している（孫2002：65頁）。

#### 参考文献

東史郎『わが南京プラトーン：一召集兵の体験し

た南京大虐殺』青木書店、1987年。

石井弓『記憶としての日中戦争：インタビューによる他者理解の可能性』研文出版、2013年。  
マックス・ウェーバー（木本幸造監訳）『社会学および経済学における価値自由の意味』日本評論社、1982年。

徐京植『植民地主義の暴力：「ことばの檻」から』高文研、2010年。

孫歌（坂井洋史訳）「日中戦争 感情と記憶の構図」『世界』673号、2000年4月、158～170頁。

孫歌『アジアを語ることのジレンマ：知の共同空間を求めて』岩波書店、2002年。

戴錦華・孫歌・高橋哲哉・酒井直樹「座談会 戦争の感情記憶の壁：どう乗り越えるか」『世界』681号、2000年11月、190～205頁。

代田智明「感情としての『加害の記憶』」『中国研究月報』54巻11号、2000年11月、54～57頁。

代田智明『現代中国とモダニティ：蝙蝠のポレミック』三重大学出版会、2011年。

程兆奇（張宏波訳）「南京大虐殺＝日中対話 日本で出版された史料を概観する」『人権と教育』49号、2008年、124～147頁。

ポール・トンプソン（酒井順子訳）『記憶から歴史へ：オーラルヒストリーの世界』青木書店、2002年。

成田龍一『「戦争経験」の戦後史：語られた体験／証言／記憶』岩波書店、2010年。

日中韓3国共同歴史編纂委員会『新しい東アジアの近現代史：国際関係の変動で読む 未来をひらく歴史』（上・下）日本評論社、2012年。

野田正彰『戦争と罪責』岩波書店、1998年。

野田正彰『虜囚の記憶』みすず書房、2009年。

古厩忠夫『「感情記憶」と『事実記録』を対立させてはならない—溝口雄三論文への反論として』『世界』692号、2001年9月、136～146頁。

溝口雄三「日中の対話 日中間に知の共同空間を創るために——孫歌論文に応じて」『世界』

679号、2000年9月、127～138頁。

溝口雄三・孫歌「対談 『歴史に入る方法』——  
知の共同空間を求めて」孫歌『アジアを語る  
ことのジレンマ：知の共同空間を求めて』岩  
波書店、2002年。

吉田裕・森茂樹『アジア・太平洋戦争』吉川弘文

館、2007年。

吉田裕「戦場にせまる歴史学：従来の戦訓・戦史  
研究を越えて軍事史のタブーをひらく」『図  
書新聞』2894号、2008年11月15日。

吉田裕『兵士たちの戦後史：戦争の経験を問う』  
岩波書店、2011年。